

学者アラムハラドの見た着物

宮沢賢治

青空文庫

学者がくしゃのアラムハラドはある年十一人の子を教えておりました。

みんな立派りっぱなうちの子どもらばかりでした。

王さまのすぐ下の裁判官さいばんかんの子もありましたし農商のうしやうの大いじんだいじんの子も居いました。また毎年じぶんの土地から十石じゅうせきの香油こうゆさえ穫とる長者ちやうじやのいちばん目の子も居たのです。

けれども学者のアラムハラドは小さなセララバアドという子がすきでした。この子が何か答えるときは学者のアラムハラドはどこか非常ひじょうに遠くの方かたの凍こおったように寂しずかな蒼あおく黒ろくい空かんを感じるのです。それでもアラムハラドはそんなに偉えらい学者でしたからえこひいきなどはしませんでした。

アラムハラドの塾じゅくは街まちのはずれの楊やなぎの林はやしの中なかにありました。

みんなは毎日その石で畳たたんだ鼠ねずみいろの床ゆかに座すわつて古くからの聖歌せいかを諳あんしやう誦しゅうしたり兆ちやうよりももつと大きな数まで数えたりまた数を互たがいに加えたり掛かけ合せたりするのです。それからいちばんおしまいには鳥や木や石やいろいろのことを習ならうのです。

アラムハラドは長い白い着物きものを着て学者のしるしの垂たれ布ぬののついた帽子ぼうしをかぶり低いひく椅子い子すに腰掛こしかけ右手には長い鞭むちをもち左手には本を支さえながらゆつくりと教えて行くのです。

そして空気のしめりの丁度いい日またむずかしい諳誦でひどくつかれた次の日などはよくアラムハラドはみんなをつれて山へ行きました。

このおはなしは結局学者のアラムハラドがある日自分の塾でまたある日山の雨の中でちらつと感じた不思議な着物についてであります。

一

アラムハラドが言いました。

「火が燃えるときは焰をつくる。焰というものはよく見ていると奇体なものだ。それはいつでも動いている。動いているがやっぱり形もきまつている。その色はずいぶんさまざまだ。普通の焚火の焰なら橙いろをしている。けれども木によりまたその場処によっては変に赤いこともあれば大へん黄いろなこともある。硫黄を燃せばちよつと眼のくるつとするような紫いろの焰をあげる。それから銅を灼くときは孔雀石のような明るい青い火をつくる。こんないろはさまざまだがそれはみんなある同じ性質をもっている。さつき云ったいつでも動いているということもそうだ。それは火というものは軽いものでいつでも

騰のぼろう騰のぼろうとしている。それからそれは明るいものだ。硫黄のようなお日さまの光の中ではよくわからない焔えんでもまつくらな処ところに持つて行けば立派りっぱにそこらを明るくする。火と
いうものはいつでも照てらそう照てらそうとしているものだ。それから一つは熱あついとい
とだ。火ならばなんでも熱あついものだ。それはいつでも乾かわかそう乾かわかそうとして
云う工合ぐあいに火には二つの性質がある。なぜそうなのか。それは火の性質だから仕方ない。
そう云う、熱あついもの、乾かわかそうとするもの、光るもの、照あらそうとするもの軽いもの騰のぼ
うとするものそれを焔えんと呼ぶのだから仕方ない。

それからまたみんなは水をよく知っている。水もやっぱり火のようにちやんときまった
性質がある。それは物ものをつめたくなる。どんなものでも水にあつてはつめたくなる。から
だをあつい湯ゆでふいても却かえつてあとではすずしくなる。夏に銅つぼの壺つぼに水を入れ壺つぼの外側そとがわ
を水でぬらしたきれで固かたくつつんでおくならばきつとそれは冷ひえるのだ。なんべんもきれ
をとりかえるとしまいにはまるで氷こおりのようにさえなる。このように水は物をつめたくなる。
また水はものをしめらすのだ。それから水はいつでも低ひくい処へ下ろうとする。鉢はちの中に水
を入れるならまもなくそれはしずかになる。阿耨あおく達池だつちやすべて葱嶺パミールから南東の山の上の
湖みずうみは多くは鏡かがみのように青く平たいらだ。なぜそう平たいらだかとならば水はみんな下に下ろうとし

てお互いたが下れるとこまで落ち着くからだ。波なみができたら必ずかならずそれがなおろうとする。それは波のあがったとこが下ろうとするからだ。このように水のつめたいこと、しめすこと下に行こうとすることは水の性質せいしつなのだ。どうしてそうかと云うならばそれはそう云う性質のものを水と呼ぶのだから仕方しかたない。

それからまたみんなは小鳥を知っている。鶯うぐいすやみそさざい、ひわやまたかけすなどからだが小さく大へん軽かるい。その飛ぶとときはほんとうによく飛ぶ。枝えだから枝へうつるときはその羽をひらいたのさえわからないくらい早く、青ぞらを向うへ飛んで行くときは一つのふるえる点のようだ。それほどこれらの鶯やひわなどは身軽みがるでよく飛ぶ。また一生けん命めいに啼く。うぐいすならば春にはつきり啼く。みそさざいならばからだをうごかすたびにもうきつと啼いているのだ。

これらの鳥のたくさん啼いている林の中へ行けばまるで雨が降ふっているようだ。おまえたちはみんな知っている。このように小さな鳥はよく飛びまたよく啼くものだ。それはたべ物をとつてしまつても啼くのをやめない。またやすまない。どうして疲つかれないかと思うほどよく飛びまたよく啼くものだ。

そんならなぜ鳥は啼くのかまた飛ぶのか。おまえたちにはわかるだろう。鳥はみな飛ば

ずにいられないで飛び啼かずに居られないで啼く。それは生れつきなのだ。

さて斯う云うふうに火はあつく、乾かし、照らし騰る、水はつめたく、しめらせ、下る、鳥は飛び、またなく。魚について獸についておまえたちはもうみんなその性質を考えることができる。けれども一体どうだろう、小鳥が啼かないでいられず魚が泳がないでいられないように人はどういふことがしないでいられないだろう。人が何としてもそうしないでいられないことは一体どういふ事だろう。考えてごらん。」

アラムハラドは斯う言つて堅く口を結び十一人の子供らを見まわしました。子供らはみな一生けん命考えたのです。大人のように指をまげて唇にあてたりまっすぐに床を見たりしました。その中で大臣の子のタルラが少し顔を赤くして口をまげてわらいました。

アラムハラドはすばやくそれを見て言いました。

「タルラ、答えてごらん。」

タルラは礼をしてそれから少し工合わるそうに横の方を見ながら答えました。

「人は歩いたり物を言ったりいたしません。」

アラムハラドがわらいました。

「よろしい。よくお前は答えた。全く人はあるかないでいられない。病気で永く床の上

に居る人はどんなに歩きたいだろう。ああ、ただも一度二本の足でぴんぴん歩いてあの樂地の中の泉まで行きあの冷たい水を両手で掬って呑むことができたならそのまま死んでもかまわないと斯う思うだろう。またお前の答えたように人は物を言わないでいられない。

考えたことをみんな言わないでいることは大へんにつらいことなのだ。そのため病気にさえもなるのだ。人がともだちをほしいのは自分の考えたどんなことでもかくさず話したかくさずに聴きたいからだ。だまつているということは本統につらいことなのだ。

たしかに人は歩かないでいられない、また物を言わないでいられない。けれども人にはそれよりもっと大切なものがないだろうか。足や舌とも取りかえるほどもっと大切なものがないだろうか。むずかしいけれども考えてごらん。」

アラムハラドが斯う言う間タルラは顔をまつ赤にしてみましたがおしまいは少し青ざめました。アラムハラドがすぐ言いました。

「タルラ、も一度答えてごらん。お前はどんなものでもお前の足をとりかえないか。お前はどんなものでもお前の足をとりかえるのはいやなのか。」

タルラがまるで小さな獅子のように答えました。

「私は饑饉でみんなが死ぬとき若し私の足が無くなることで饑饉がやむなら足を切っても

口惜しくありません。」

アラムハラドはあぶなく涙をながしそうになりました。

「そうだ。おまえには歩くことよりも物を言うことよりももつとしないでいられないことがあった。よくそれがわかった。それでこそ私の弟子なのだ。お前のお父さんは七年前の不作のとき祭壇に上つて九日禱りつづけられた。お前のお父さんはみんなのためには命も惜しくなかつたのだ。ほかの人たちはどうだ。ブランド。言つてごらん。」

ブランドと呼ばれた子はすばやくきちんとなつて答えました。

「人が歩くことよりも言うことよりももつとしないでいられないのはいいことです。」
アラムハラドが云いました。

「そうだ。私がそう言おうと思つていた。すべて人は善いこと、正しいことをこのむ。善いと正義とのためならば命を棄てる人も多い。おまえたちはいままでにそう云う人たちの話を沢山きいて来た。決してこれを忘れてはいけない。人の正義を愛することは丁度鳥のうたわらないでいられないと同じだ。セララバアド。お前は何か言いたいように見える。云つてごらん。」

小さなセララバアドは少しびっくりしたようでしたがすぐ落ちついて答えました。

「人はほんとうのいいことが何だかを考えないでいられないと思います。」

アラムハラドはちよつと眼をつぶりました。眼をつぶったくらやみの中ではそこら中ぼうつと燐の火のように青く見え、ずうつと遠くが大へん青くて明るくてそこに黄金の葉をもつた立派な樹がぞろつとならんでさんさんさんと梢を鳴らしているように思つたのです。アラムハラドは眼をひらきました。子供らがじつとアラムハラドを見上げていました。アラムハラドは言いました。

「うん。そうだ。人はまことを求める。真理を求める。ほんとうの道を求めるのだ。人が道を求めないでいられないことはちようど鳥の飛ばないでいられないとおんなじだ。おまえたちはよくおぼえなければいけない。人は善を愛し道を求めないでいられない。それが人の性質だ。これをおまえたちは堅くおぼえてあとでも決して忘れてはいけない。おまえたちはみなこれから人生という非常なけわしいみちをあるかなければならない。たとえばそれは葱嶺の氷や辛度の流れや流沙の火やでいっばいなようなものだ。そのどこを通るときも決して今の二つを忘れてはいけない。それはおまえたちをまもる。それはいつもおまえたちを教える。決して忘れてはいけない。」

それではもう日中だからみんなは立つてやすみ、食事をしてよろしい。」

アラムハラドは礼れいをうけ自分もしずかに立ちあがりました。そして自分の室むろに帰る途とちゆ中ちゆうふとまた眼をつぶりました。さっきの美しい青い景色けしきがまたはつきりと見えました。そしてその中にはねのような軽かるい黄金いろの着物きものを着た人が四人まっすぐに立っているのを見ました。

アラムハラドは急いそいで眼をひらいて少し首をかたむけながら自分の室に入りました。

二

アラムハラドは子供らにかこまれながらしずかに林へはいつて行きました。

つめたいしめった空気がしんとみんなのからだにせまったとき子供らは歓呼かんこの声をあげました。そんなに樹きは高く深ふかくしげっていたのです。それにいろいろの太つるさの蔓つるがくしゃくしゃにその木をまといみちも大へんに暗くらかったです。

ただその梢こずえのところ物もの凄すげいほど碧あおいそらが一きれ二きれやつのぞいて見えるきり、そんなに林がしげつていればそれほどみんなはよろこびました。

大臣だいじんの子のタルラはいちばんさきに立って鳥を見てはばあと両手りょうてをあげて追おい栗鼠りす

を見つけては高く叫んでおどしました。走ったりまた停ったりまるで夢中で進みました。みんなはかわるがわるいろいろなことをアラムハラドにたずねました。アラムハラドは時々はまだ一つの答をしないうちにも一つの返事をしなければなりませんでした。

セララバアドは小さな革の水入れを肩からつるして首を垂れてみんなの間やアラムハラドの答をききながらいちばんあとから少し笑ってついて来ました。

林はだんだん深くなりかしの木やくすの木や空も見えないようでした。

そのときサマシャードという小さな子が一本の高いなつめの木を見つけて叫びました。

「なつめの木だぞ。なつめの木だ。とれないかなあ。」

みんなもアラムハラドも一度にその高い梢を見上げました。アラムハラドは云いました。「あの木は高くてとどかない。私もはその実をとることができないのだ。けれどもおまえたちは名高いヴェーツサンタラ大王のはなしを知っているだろう。ヴェーツサンタラ大王は檀波羅蜜の行と云ってほしいと云われるものは何でもやった。寶石でも着物でも喰べ物でもそのほか家でもけらいでも何でもみんな乞われるままに施された。そしておしまいとうとう国の宝の白い象をもお与えなされたのだ。けらいや人民ははじめは堪えていたけれどもついには国も亡びそうになったので大王を山へ追い申したのだ。大王はお妃と

王子王女とただ四人で山へ行かれた。大きな林にはいったとき王子たちは林の中の高い樹きの実みを見てああほしいなあと云いわれたのだ。そのとき大王の徳とくには林の樹きもまた感じかんじていた。樹の枝えだはみな生物せいぶつのように垂たれてその美うつくしい果くだもの実みを王子たちに奉たてまつつた。

これを見たものみな身みの毛けもよだち大地ちがひも感じかんじて三べんふるえたと云うのだ。いま私はこの実みをとることができない。けれどももしヴェーツサンタラ大王のように大へんに徳のある人ならばそしてその人がひどく飢うえているならば木の枝はやつぱりひとりでに垂れてくるにちがいない。それどころでない、その人は樹をちよつと見あげてよろこんだだけでもう食べたとおんなじことにもなるのだ。」

アラムハラドは斯こう云つてもう一度林いちぢの高い木を見あげました。まつ黒くろな木の梢こずえから一きれのそらがのぞいておりましたがアラムハラドは思わず眼めをこすりました。さつきまでまつ青さおで光あかりっていたその空そらがいつかまるで鼠ねずみいろにこに濁にごつて大へん暗くらく見えたのです。樹はゆさゆさとゆすれ大へんにむしあつくどうやら雨が降ふつて来きそうなのでした。

「ああこれは降ふつて来る。もうどんなに急いそいでもぬれないというわけにはいかない。からだの加減かげんの悪わるいものは誰だれ々だれだ。ひとりもないか。畑はたけのものや木には大へんいいけれどもまさか今日けふこんな急きゆうに降ふるとは思おもわなかった。私たちはもう帰かえらないといけな

けれどもアラムハラドはまだ降るまではよほど間まがあると思っていました。ところがアラムハラドの斯こう云ってしまいかしまわないうちにもう林がぱちぱち鳴りはじめました。それも手をひろげ顔をそらに向けてほんとうにそれが雨かどうか見ようとしても雨のつぶは見えませんでした。

ただ林の潤ひろい木の葉はがぱちぱち鳴っている〔以下原稿数枚？なし〕

入れを右手でつかんで立っていました。〔以下原稿空白〕

青空文庫情報

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年4月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月～

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2005年9月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

学者アラムハラドの見た着物

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>